

三つやりの光

三つやりの光
 三つやりの光
 三つやりの光
 三つやりの光



体化祥枝田

體現の卷

○ 體現の位	一
心霊生活の衣食住	二
聖意を己が意志とす（人生は向上の一路）	五
聖意を現はす行為	八
菩提心	一二
○ 光明生活に入る階位	一
信仰過程 光明生活三階	四
初喚起因縁	五
信心喚起の資料	六
喚起の二機 自修と伝承	七
喚起の順序	八
開發の位	九
第三、體現	〇
融合一致	四
行、向、地。一超日月光	七
自修一性格一性種性	八
長養	九
向	一一
十聖（又十地）	一二

體現の位

智慧の日月の照す下 光の中に暮す身は
 聖意を己が意とし 三業四威儀につとむなり
 已に信心開發し靈我に更生したる後は即ち佛子である。
 如來と共に在り、如來の中に我あり、絶對無限の如來は個性なる我に依て現はる。
 佛子なる我は天地萬物を脚下に踏へて、高き宇宙の無限も此個體の中に溶け込んで居る。此自己は絶對の大海に根底を隠して尖頭を水上に現はして居る巖である。若し此個性が無くなるとすれば宇宙萬物は悉く己に於て價値が滅して仕舞ふ。
 佛子たる我は一方には作佛度生の二心ありて、一方には如來の智慧と慈悲との光明中に佛子の願望たる圓滿なる靈我を充實せんが爲めに、益々向上的に一步々々に新なる土地を開拓して、佛に成らんと進行すべきである。

即ち開發は我如來の子として父の全き如くに全からんことを願望し、一切菩薩の萬行を以て、佛子の靈格を莊嚴す。

心靈生活の衣食住——衣

例へば此の身體の生活にも衣食住を要する如く、靈の生活にも靈の衣食住が必要である。

心靈に如來の賜なる應法妙服を着る。應法妙服とは自己の如法なる道德秩序の正しき生活を云ふ。俗に云はゞ常識に應ふやうな生活である。人格を莊嚴する處の品位を完全に爲なくてはならぬ。恭儉以て己を持し仁讓以て佗に待す。先王の法服に非れば敢て服せずと云ふごとく、法に如ふ行爲を以て（ ）また經に應法の妙服が自然に身に在りてふは、信心誠に得る時は、自然に人格が具備して道德秩序の正しさが自ら身に備つて來ることである。

衣に慚恥衣と云ふは心光身を照して己が行爲を返照すること、神聖なる光明の中に廉恥の服を身につけてあれば破廉恥の行爲は自分と慚み、如來照鑑の前に常に屋漏に恥つと云ふやうな慚が身に備はるのを慚恥の服と云ふ。また柔和忍辱の衣とは慈悲の光に觸るれば身意柔和となりて苟且に怒らず他人より罵詈謗態を被むるも忍辱の衣厚ければ快く忍耐が出来る。經に「縦令骨節支解せられても、甘露を飲むが如くに悦べよ」と

食

食は靈の糧。身體に滋養に富む物を攝取する如くに靈にも滋養分を要す。朝夕の禮拜讚唱の中もまた三昧にして、若しは冥想中に三昧の妙味を感じ、また常に念に隨つて法喜ありて、内心の靈感極りなく覺へらるゝが故に、自ら神魂を潤ひ、身心輕安、歡喜樂りなきに至る。また「佛法の味を愛樂し、禪三昧を食とす」とは此靈の食である。また佛陀は一餐の力を以て無量劫飢えず衰へず姿色も清らかに光顔も異なることがない

と。此妙味は法悦と云ふ靈の妙味を味ひし人にして始めて語るべきである。

住

心靈の安住する所 即ち平生心の安んずべき所、この身體も住家なきは乞食非人の如くである。又縱令身は金殿玉樓に住すとも精神に安住所なきものは靈の非人である共に天を語るべき資格はない。靈は云何なる所に住すべきであるかとなれば、吾人は常に如來と共に大光明中無比莊嚴の心殿に住してゐる。慈悲の懷に安住して居る。若し心靈の常恒安住する心殿を見ることが得ば、また大悲の堂と云ふも自己が如來大悲の室に安住して居る時は、自己もまた慈悲化して佗に對して同體大悲の同情心に富んで來る。心靈如來大我の中に安定するが故に娑婆の種々八風のために動搖せられぬ。

人は衣食住を全うして禮節も成る。心靈の衣食住にしてまだ完全せざる者にして道德行爲が出来る筈は無い。心靈の衣食住は如來と共に在ることを得れば自ら具備するに至る。

聖意を己が意志とす (人生は向上の一路)

人生の價値は大なるものと聯絡したる心意が終身その力を盡して努力する處に價あり。己に如來の中に安住し心靈生活に衣食住を要するものは働かぬのである。

聖意とは神聖正義恩龍の三徳を云ふ。如來の神聖は即ち行爲を鑑照し給ふ智慧である。如來は世の道德秩序の光明である。如來は一切衆生を有終の全き目標として神聖の智光普く衆生の道德界を照し給ふことは、恰も太陽が外界を照すが如くである。若し太陽の光微りせば世は闇黒である。衆生の道德界に神聖の光明微りなば道德秩序は闇黒である。神聖の智は吾人の心地には正知見の心にて、眞理の標準に稱ふ正中心意志と現はれて自己の道德行爲を指導する光となる。即ち如來から自己に現する意志である。最高理想の道德意志である。それが即ち正知見と云ふ最高等なる良心である

其神聖は真理であるから侵すことが出来ぬ。其の正知見から出づる行爲は即ち正義である。邪と悪とを捨て、正と善とに向つて努力することである。

如來の本願、捨惡擇善と云ふは正義のことである。

正義に入正道あり。是聖意に稱ふ行爲である。光明行爲の標準である。八正道とは正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定を云ふ。

神聖なる正見が意志の光から思惟することは正しい。人正見の光缺くれば邪の思考が頭腦中に浮び、思想が正しければ其を外に發表する言語も虚偽惡口兩舌等なく、眞面目に正直に出づる。また身に於て行ふ所も正善となる。殺生、偷盜、邪淫等を始め

すべて不正の行爲を遠けて正善を行ふ。正命とは生活の意である。人の生命は縱令詐偽偷盜等によりて得た食物にても養分さへ取れば肉體は養はる。併し斯の如きは不正なる生命である。渴しても盜泉の水を飲まず、正しき生活をなす聖き生命である。

正精進とは勇猛精進に努力すべき事、之正善でなくてはならぬ。假令晝夜二六時中身心を苦勵して頭燃を救ふが如くなるも聖意に稱ふ行爲でなくてはならぬ。正念とは内的に活動するは念である。所謂八億四千の念が若し聖意より自己の心に衝動する時は念として佛ならざるはなし。古人云はく、一念彌陀に在れば一念の佛、念々彌陀なれば念々の佛と。内に佛の念を以て活動する時は、外に向つてまた佛行を爲す。

正定は一心に聖意が全く自己の意志と成て動ぜざるを正定と云ふ。此八正道は神聖正義を體して身口意の三業に現はす道業である。

恩寵、前の神聖正義の聖意が衆生の心意として實現するに至るは已に信の成熟したる上に於て能くす。譬へば小兒は成人の後に至き業務に堪へ得らるる如くに、佛子たる心靈が成長して後、聖意を現はすつとめが出来ぬ。人の此の心意を増長せしむるは如來の恩寵である。恩寵は母が子を養育する如き作用にて、如來大慈愛の光は人の靈性を増長せしむ。前の靈性の衣食住の例の如きは悉く如來恩寵の加はる所に於て行はる。

る。

聖意を現はす行爲

聖意を體現するは光明の行爲である。聖典に、聖きに生れ更りたる聖徒等は、其講説する所あれば聖き思想の發表をして常に正しきを宣ふ。是己の心正しければなり。

正しき智慧の明から出づる言は、道に契ふて違ふこと又過失することなく、衣食住等の凡ての物に我有の心なく、染着の心なく、去るも來るも進むも止るも情に繋がるるなく、自由意志が最もよく發達してあれば、之を適し彼は莫くすと云ふなく、いかなる境遇にも自ら満足を感じず。

公平無私にして彼と我との私の闘なれば、他と競争することも又他人の非を説くこともなく、諸の階級の人に對して彼を見ることが己の如く知り、同體慈愛を以て凡てを饒益せんと想へり。人格圓滿に訓練、溫良、柔軟に、已に調伏しあれば、假令他より罵詈譏諷せらるるも、怒り又恨むなどの心なく、佛の心を以て己が心とす。

能く身と心とを調へて清き時は、其爲す事に厭ひまた怠る心出でず。公明正大と高尚なる理想と深遠なる情操と能く統一せる意志と、また真理を愛し真理を樂ひ真理を喜ぶの心のみなり。すべての弱點から清められ惡趣の心を離れたり。一切の聖き人の行ふべきを究めて無量の功と徳とを具へ成就せり。心常に深く禪那と神通と妙慧とを以て志を七覺に遊ばしめ、自ら覺しまた他を覺せしむ。

肉眼清徹に分明なるが故に、常識に富みて己を恕りて他に待す。天眼通達して無限の故に、能く天心にかなふ。法眼を以て道德の真理を究め、慧眼が眞理を見て終局に達す。佛眼具はりて眞理の底を極め、聖意より我に通じて聖意をすべてに示す。等しく此三界は空また實には無所有と觀じて、而して愈々佛法を求め、諸の如來の道を自ら徹底して衆生の煩惱の患を除滅す。

眞に私なく、神の聖意より出づる言葉は泉の如く、衆生の煩惱の炎を滅す。如來の眞理を我心とするが故に眞理の如々を解ることが得らる。

る。

善く煩惱と習氣とを滅するの方を知る者は、世の戯論を欣はず、正しき論のみを樂ふ。諸の道德の本は己が意を清むるに在る事、志佛道を崇む。一切の法の本源は煩惱を寂め、迷雲を滅すれば真如の月顯はるる。其聖く澄める心には惱と慾は俱に盡せり。自ら真理を究むる者はいかに甚深第一義を聞くも敢て心に疑と懼とを抱かず却つて能く修行して之に達せんと志す。慈愛の心深遠にしてすべての人を覆ひ、慈愛の心の大なること天の覆ふ如く衆の苦惱に同情して地の物を載する如くに、一切は如來の子なれば一切と共に父の許に至らんと。我等が疑の網を決くは如來の慧より出づ。眞實に疑の網を決断せんは自己の慧より出づ、他人より教を受けるは知識を得るのみ。自ら慧の光が現はるれば佛の教法を該羅して遺すことなし。

智慧の廣く且つ深きこと大海の如く、一心の三昧に心の搖ざること山王の如し。慧光明るきは日月に超えたり日月は外界を照せるも真理を照すこと能はざればなり。聖められたる靈格具足し圓滿して志節の清められしこと雪山の如し。大人の量の廣きこと大地の淨と穢と好と惡とも平等に異心なき水の如し。淨き水の如くに心の垢染を洗ひきよむ。猶猛き火の一切の煩惱の薪を焼き滅する猶し。また大風の如し、諸の世界を行くに障りなきが故に。また虚空の如くに一切の有に執着なし。蓮華の如く世間の染汚の中に染まず。大なる列車の如くに迷の衆生を運載して安きに出だす。大なる雷の震て人の眠を覺ます。大雨の如く甘露の法を雨す、云々。

菩提心

菩提心の中心、情操、菩提とは人の心が阿彌の恩寵との致一の心機にして、人の初めて菩提心を開展するは、佛知見の開示にして、啓示に無明の夢覺醒して、從前の天然自己を滅殺するに至る。此の自己滅殺は情操轉依の消極の極にして意志信仰の覺醒は積極の初めなり。啓示が先驅にて、次に心情に更生、情操轉化、次に意志靈化、この三を合して菩提心と云ふ。

菩提心に情操を中心とするは、情操は人を司導する原動力にして、この情操の轉化は即ち更生なり。この更生は全人格の精神生活の更生にして、一切の意志主我を眞我の中に歸命せしめ、全心を盡して、阿彌に歸入するが故に、更生と云ふ。人の肉の心理機定の轉化を變ずるが故に、また轉依とも變易生死とも稱す。

更生は初め佛知見により、初めて正知見覺醒して、次に情操を轉化してよりは、大菩提を自己意志として、其の目的に協力して、積極的方面に活動するにあらざれば、菩提と云ふにたらず。

菩提心は正知見にて、心情を照すが故に、自己の惡を見ること明かにして、全く從前の主我主義と異にして、自己の罪惡を滅殺すること、所謂曉明に賊を捕へるが如し天然の妄知見と情操とは賊を認めて子とするが故に、賊を滅殺すること能はず。

人は菩提心を發し、覺醒せざる間は、罪過を認むる能はざるが故に、自ら罪惡の中にあるも嫌せず、正知見によりて道を顯現すれば、賊即ち罪惡の種子を滅殺せざれば安んずる能はず。

自己胸中の阿彌、即ち良心と、衝突すべき罪惡は憚りなく殺滅し、人は全く恩寵によりて情操に轉換し、罪障消滅するにあらざれば、自ら安んずること能はず。已に情操轉化するときは、自ら阿彌の中に全く安穩なる情となることを得るに至る。已に

自ら神的安穩なるは、罪障消滅したる心情の状態なり。言を換て云へば、神の免罪の宣告を得たるものなり。

融合—致一

人は罪障消滅して恩寵に融合し、大菩提心として大菩提の勢能に致一して融合したる情操は、煩惱のみならず、苦毒も理想に解脱して常に有爲の生滅のあるにか、はらず、情理には観念的に阿彌の中に安住し、即ち表面の有漏の浪風はあらうがま、心情は阿彌の宮殿に安住して、世の誘惑を恐れず、また大火に焼かるるとも吾が此の土は安穩にしてと説くが如く、全く真我の中の自己として安寧なる精神生活をう。

心情の内面には、最深の内面は無量永恒の中の生命として、無限の壽の生命として人は大火に焼るるも我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり、園林諸の堂閣、種々の寶をもて莊嚴すとは、真我と融合したる内容を表明したるに外ならず。

意志の安立

罪障消滅し、神的融合の心情と共に、意志には靈化、菩提心として阿彌との致一の意志をなす。

心情融合の花は、靈化の意志の實を結ぶべき方便にして、靈化の精神が最も圓滿に自己を成熟したるは已に菩提心成じたるなり。

靈化したる意志、靈化したる靈格を、法王子また童真と云ふ。また内面に阿彌と致一の意志には法王子と名づく。この菩提心が一切の情操を司りて、また一切の行爲を命する處の原動力となる。然れども靈化は菩提心の性格にして、未だ行爲にあらず、一切の神的行動の衝動たり。

この靈格的衝動より發動する行爲は波羅密にして終局に到る過程たり。

知—煩惱罪惡の認識

情—罪過の感情、苦悶

意—煩惱を滅殺する意志の反動

一、煩惱の所在を發見するは啓示によりて覺察したる知力にして。

二、知見に照らさるる感情は良心によりて煩惱より衝動せる罪業が良心と衝突して此の罪障の感情に苦悶す。

三、この賊を知り(知力)之を嫌忌して苦悶する感情も、賊を捕縛して殺すものは惡に反抗する意志の性能、即ち(一)修練する意志なり。

古人曰く、戒は賊を捕へ、定は之を縛し、慧は賊を殺すと。

今は知力の恩寵にて賊を發見す。心情の恩寵は賊を縛す。意志の恩寵は賊を殺す。之は消極。更に積極には安住。歸命—あみに歸入し。心情致一に融合し。安立す。

行、向、地。—超日月光

靈格と菩提心とは已に明しぬ。神的道德心は如何に自ら修練して波羅密即ち圓滿に到達すべきや。

行とは徳行、先づ自己の意志を無上道に行爲すべきに、波羅密は常恒の過程なるが故に、不斷に進趣して退轉すべからず。神的意志が行爲をなすべき性格鞏固にならざるべからず。

この過程は二河白道の譬の如し。無上菩提の神的白道に貪瞋等の水火の二河動もすれば道を横領せんとす。

健闘。

然れども波羅密の岸に到る意志の、神的行爲の、清白の吾人が無上道意の道は、已に白道たることを意識す。

恩寵による注意と勇氣とを緩むる時は、六賊は後より來て、虚偽の愛の面を被りて菩提心を掠奪せんとし、貪瞋の二河動もすれば神の自己をひたさんとす。神の聖き名により、幡をたてて、健げなる健闘に、勇氣を鼓舞して、之を攻むるに非ざれば敗走を免れず。

所謂佛吼をもて吼し、法鼓をうち、法竈を吹き、法劍を執り、法幢を建て、法雷を震ひ、法電を曜かし、法雨を澍き等、菩提の意志は自己胸中の煩惱魔を習怖して歸伏せしむ。

外寇は恐るるに足らず、自己の主我幸福主義の内賊だに伏滅せば、いかに六賊侵來するも、之を防禦するは容易なり。

自修—性格—性種性

行の位を性種性と名づく。菩提道徳性を自ら修練して、從來襲ひ來りし惡習を變じて、神の性格に變化せしむるなり。

佛性即ち遺傳恩寵の神聖正義の正因と思寵との善を精修し、菩提心を發達せしめて、神の活動をなす性格を熟達せしむ。菩提心は利己主我幸福主義を棄捨して、良心と衝突する所の意志の素質を捨つ。

波羅密は中途に滯らず、他くまで至善の中心なる阿彌に向つて進趣すべきの性格にして、鞏固に熟練精修して、天然の意志が鑛垢をさりて、純正に神の性格をなすべきなり。主觀を鞏固にして客觀目的に活動す。

長 養

此行を長養ともいふ。菩提即ち高等なる善心を修練して、波羅密の過程の進むに、恩寵を本として、更に恩寵の開展進歩を助く。改善に精進して、智慧は能く知りて

退せざるを要す。菩提心は自己の終局目的に、即ち菩薩の天職として、自己を盡し、菩提の善に改進し、性格の改善は、情操菩提によりて鞏固なり。

人の菩提心とは、情操が神的情操に更生、生活と性格が改善の道徳的過程と共に連絡して全うするを得べし。

長養は、たとへば一時の收穫をほこりて共に肥料と耕耘とを怠るは、終局の目的に好結果を見ること能はざるべし。

十行は改善して恩寵による人の意志の結果にして自利の結果なり。是よりは進んで客觀目的に阿彌の中の活動をなすは十向にあり。

菩提心自利修練
健闘精進
性種性をなす
自己の道徳長養

向

波羅密の客觀的に阿彌の目的に協力するは、先には自利の菩提心の修練熟達、之よりは阿彌の理想にと、一切衆生が阿彌の中の衆生なれば、眞我の我には彼我なく、同事利行ならざるべからず。是實行行爲が全く菩提の行爲にして、阿彌に合一したる人の意志として活動す。即ち絶待阿彌の個人現なり。

一、救護衆生、離衆生相、一切衆生は同じく阿彌の理性なるが故に。向とは事を回らして理に向ひ己が所作を悉く衆生に回らして衆生に向ふ。

活動不壞、天然に支配せられたる意志を脱して、靈化の意志は神的活动衆生に入りて利せしむる、他縁に遇ふも性格堅固にして、金剛の意志壞られず、致一、内面致一の個人として、菩提の活動す。神の意志内容を自己の目的とす。

若しこの目的に協力せざれば、菩提に衝突す。隨順衆生、道德的自律が客觀的目的を主觀の自目的とす。即ち一切衆生は阿彌の同一理性なれば、衆生の苦は我が苦なり衆生の罪惡即ち我が罪たりと。故に經に衆生の病は即ち我病なりと。

恩寵によりて圓滿に靈化せられたる道德情操即ち道と爲す。この道情が實行また修練し長養し來りし結果道種とす。道種は是より己に成熟したる種性が其の種性をもて客觀界一切に普く施さんとする勢力なり。

道德の成熟したる種をもてまた一切に播布すべき種性なり。

道とは即ち菩提にして性種性は改善の性格、道種性は加ふるの菩提の長養し來りし、道の菩提とは阿彌の聖意をもて自己の心として、阿彌即ち自己と、恩寵に入ての道德態、一即一切、衆生を自己として阿彌の中なる自己の客觀的自己道心を道種性とす。

この種性を鞏固にしたるを金剛と云ふ。先には絶待の中の個人の性格を鞏固にせしを、いまは法縁、自己を鞏固にす。已に是まで自己修練の結果よく經驗あるをもて阿彌の中の衆生に之を頒ち、之をたすけ、自己のなすことは即ち阿彌の實現にして之を見聞の輩をして菩提心を起さしめ、其の三業の所作が即ち阿彌の聖意の實現として、彼を刺激して道心の動機となす。故に我が身を見んものは菩提心を發し、我が説話を聞くものは斷惡修善せよと云ふが如し。

菩提上求下化

上向向下、致一

金剛不壞

道種性、利他の原動力

利他

十 聖 (又十地)

佛知見啓示によりて、佛の正道に悟入して、自己絶對なる真理と觀念的に致一たることを證明し、また其屬性たる報應の二身、依正の莊嚴も、精神態に證明し、感情には罪惡の主たる自我及び屬類を滅殺し、真我の中に融合し、之に安立し、靈化の恩寵によりて道德情操を鞏固にして性格を完成し、自利の徳を完うす。向位としては己に知見し融合したる阿彌の中なる客觀的即ち衆生なれば、真我の中に同一の理性たるを知れば、即ち同事利行衆生の模範となり、また自己の火をもて他の木を燒くが如く同體の愛をもて彼を見るのみならず、彼を利するを以て自己の利とす。

次に進んで聖位に入りては、絶對阿彌を離れて我なく、其の目的を自己の目的とし精神生活の全體を阿彌に投じて、表面は個人なるも内面は阿彌の一員にして、之を意識するのみに非ず、精神に全然自我及び天然の惡素質を脱却し、客觀目的が全く自己の目的にして、自己は客觀の方便のみ。所謂十方界に入て苦の衆生を救攝せん、虚空法界も盡きんや、我が願も亦斯の如くならんと。

大菩提心は絶對をもて自己とす。故に自己を度するも他の個々を度するも同じなるべし。

論註に、菩薩は己が智慧の火をもて一切衆生の煩惱の草木を燒く、若し一衆生として成佛せざる有らば我れ作佛せずと。

一切衆生を度し盡すとは、個人即ち全體阿彌の故に、絶待の内面には自他なきが故に、また自ら先に成佛して他を度すことは、火樑を一切の草木を摘みて燒きつくさしめんに、草木未だ盡きざるに、火樑已に盡く。其身を後にするに、而も身先だつが如し。菩薩一切を攝取して同じく終局に歸せしむ。

地

阿彌の個人として、神聖正義と恩寵とによりて、その性能とし、聖的衝動に行爲して、地より萬物を化育するが如し。また地は大地の如く、絶對阿彌の恩は天の日の如く、太陽等が地上の萬物を化育するが如く、信阿彌の聖(決)して動かす。阿彌の内容

として、神聖正義恩寵に同化して、よく聖化したる内容の聖的衝動にして、内の徳光は自ら世間を照し、自利々他世の光となりて、物をして感化し、また大地の萬物を生ずるが如く、譬へば絶対の阿彌の性能は天の如く、よく靈化したる菩薩の菩提心は地の如く、地ありて萬物位し萬物育するが如く、天と地との關係によりて萬物の發育する如く、靈格の人と無限の恩寵との關係によつて、無限の恩寵を發現す。絶対の恩寵は本來法界に周遍するも、靈化の人格によらざれば顯現するによしなし。楞伽に、所謂十方報應變化身は是なり。釋迦、龍樹、天親、慧遠、善導、天臺、南岳、永明等。

また變化身は、キリスト、マホメット、モーゼ、(一)スナ、ソクラテースの類はみな靈化せる精神態の人にして、即ち無限の神聖態を個人に化現したるに外ならず。之等がみな當時の人間に出でて、無限の恩愛を、個人現の代表者たるのみならず、其門下より、其の末葉に至るまで、また皆其の理性の具せざるはなければ、内容に何の程度まで發達せしやは他は之を測り知ること能はざるも、其の靈化と其の後の行為に於て、(一)

また十地は一切の衆生を載せて宇宙解脱を目的とせる意志なれば、無縁の慈を與へて一切を荷負する故に地と名づく。無縁の慈とは絶対真我には自他なく、一切自己ならざるはなし。衆生は真我の個々なれば、孰れか疎親あらんと、阿彌の根底に立つて、同情を表すを云ふ。阿彌の内容を自己の内容として、恩寵に充たされて、幸福主義なきが故に、神的平和にして、内容つねに靈福なるが故に、歡喜の地に安立す。衆生を見るに自我を離れ、平等阿彌の内容によりて見るが故に、同體、違順の情を離れて愛憎なく、自己に染著なく、他に適莫なく、彼もなく我もなく、競もなく、認もなく、怨恨の心なく、離蓋清淨にして、厭念の心なし、故に離垢と名づく。内、神聖正義恩寵に充たされて、聖的衝動の言語動作に於て世間を照し、道德秩序のすべての動作として、世を刺激して感化せざるなし。發光と云ふ。

内に神聖正義恩寵を以て、先には時により縁に隨つて發現せしも、一般に感化を施して、客觀の神聖態として、道德秩序の正しき社會制度に顯はしたるは標準光明となるが故に、炎慧地と名づく。阿彌の個人現が地上の淨國を建設せんとして、炎慧の光が社會を照して、道德秩序が社會に顯はされんと欲するに、照したる劣態、或は背徳の社會が、漸々に化して、この善惡の二流は漸々に道光あらはれて、世の惡の闇は善の光に勝ち難く、道德秩序の光が黑暗を照破せんとするを難勝地。

社會に化現したる阿彌の道光は益々熾盛にして、魔雲妖霧は漸次にしりぞけて、理想の淨國斯の土に現前し、個々の身心生活完全に發展し人間最深の奥たる宗教機能開發し、黄金世界を顯す。

阿彌が地に顯はれて精神の黄金世界は現前すとも、現時代のみならず、其基礎を鞏固にして、永遠に行はしめんが爲めに教團を作り、すべての永遠に傳(一)せしむべき準備をなすなり。

教團が鞏固となり、此一教團は弘(一)、表面の各自は内面致一にして、數多の個々は絶対真我の化現として、不動の信念と道德的秩序の源なる性格を鞏固にす。相互の内容の神は互に映寫し、甲の道光は乙を刺激し、乙の行動は甲の模範として善く互に慧光と慧光とをもつて開展し發達すべし故に善慧と名づく。

此が客觀の社會の制度に顯はる、菩提の即ち道德態は、主觀界には個々の道德とし、客觀には社會制度の道德と顯現し、地上の天國を建設するの法規となる。元來斯の如きの菩提の本體と性能とは、法界に周遍して充たざる處なく、一切を覆ふて神靈化するところの性能にして、業に循ひ縁に隨つて發現して、普く一切を活し開展して靈化するべき本質性能なるが故に、法雲と名づく。

初發心の宗教憧憬としては、個人主觀的に發生し、漸々に開展發達して、個々が圓滿に發達、次には、十地は客觀を個人とし、即ち菩薩は自他なし。教團が廣く云は

客觀の内外絶對眞我を我として、この團體の發達は初一の主觀よりして全世界を覆ふに至る。其の發生は一人よりなるも其の本質性能は法界に充塞するが故に處として流衍せざるはなし。

十地をもつて十地の天國として、理想的に淨國を顯現し、一切の個々の宗教的心機を完全に發達せしめて遺憾なからしめ、客觀界に觀念的に安寧世界即ち淨土を建設し吾が土は安穩にして天然の人の苦毒と感ずる世界には已に超越したる宗教の世界觀には靈福ならざるなし、故に吾三界の如くに三界を見ずと。

超世の悲願を聞しより、我らは生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねど、心は淨土にすみ遊ぶと。

超世とは、世は天然世界の主我また世界依屬の意象なり。超越して、この物質にかはらず、精神の意象を轉じて、阿彌に超入すれば、個々悉く淨土ならざるはなし。

導師の、捨此穢心、即證三彼法性之常樂、
吾此土娑婆即寂光土にして、天然を超越したる意象には、觀念的に寂光土顯現す。天然の人は感覺世界の外に世界觀なし。

吾人の世界觀は阿彌陀佛去此不遠、感覺によらずして觀念的に盡十方無碍光界に安住し、法界に充塞せる大菩提の性能に協力して、一切と共に神的生活し、理想的の淨土に安立し、本来精神は阿彌の中なれば、終には實在的に解脱して歸入す。
不入不出、永恒の生命として、神的活动、即ち菩提の本態と致一せん。

聖

聖とは知情意の三機能圓滿に、精神及び身體の精神生活に於て最完全に發展し、絶對眞我に安立し、無上道德の終局目的に協力して、全く自己を脱し、大菩提即ち宇宙の終局目的を自己の目的として神的活动するもの、表面は己人の如くなるも、全く内容は阿彌にして世の光明となり。大經に、如來の辨智を得て一切を開化し、世間に超えて心は常に度世の道に歸住し、一切萬類のために不請の友となりて、群生を荷負

して之が重擔となる。と云ふ如きは是なり。
導師、然師、及び自己を脱して全く阿彌の個人として世を化するもの悉く聖なり。たとひ外面によらず内面に完全圓滿に靈化せしものは悉く聖なり。
自己を離脱して大菩提心をもて自己と定めて其神の衝動より活動するものはみな聖となす。

十聖の位は、
大菩提心に自他なし。客觀の團體の濟度程過は即ち自己にして、無上菩提は願作佛心とは即ち是れ度衆生心、度衆生とは心即ち攝取衆生、終局に歸趣せしむる心是なり。



光明生活に入る階位

(一) 喚起位——聖種播付
如來光明の眞理を聞き、光明名號を父とし、信念を母とし、聖種となりて聖胎とす。

修養五行(朝夕の)
喚起滿位五行を以て信念を養ふこと、胎兒心靈覺醒して臍に如來を信すること、兒の分婉せる如きに例ふ。

(二) (イ) 開發の初期。心靈開發の先驅として一に靈的愛戀の眞情、一ら如來に懽かれ一心に如來を見んと欲して止まず。

(ロ) 開發の滿位。智見を開きて如來の相好光明慈悲智慧法身の體を知見す。
(ハ) 開發内容。如來大我の恩寵の光と衆生小我の心と融合し、入我我入、三密相

應のすがた。

同じく意志に於て、從來の罪惡の我は一轉して如來の靈子となり、人格革新したる時即ち佛に、汝は我子、我は汝が父なり、我志を紹げよ、我所有は汝に與ふと。

(三)體現位。十行、如來の心光を被りたる聖子として聖旨を身と口と心との三業の行為に顯はす。道徳心の行なり。

金剛。光明に靈化せられたる意志、金剛の如く、勇猛に自利を作す。

十地。自己に結びたる種子をすべての人類に播付して、佛種子を斷せざらしむ。地より萬物植物を長成せしむる如し。如來心光に靈化せられたる身心を菩薩界と名づく衆生心は月の如く如來心光は太陽の如し。衆生心、如來の光を被むる時は新月よりますます進みて満月となる。

此の光を受たる者を菩薩と稱す。全く圓滿に達したるを佛陀と名づく。

佛道修行の要ここにあり。また能化者は能く其所化の衆生の精神を表象せる相を識り、其性を察し、乃至、十如の理に於て諦觀し、惡道を有漏の迷趣より救濟し、靈的菩薩の心を()生し其天性と習慣性の弊を淘汰し、靈性を開展せしめ、其内容を如來の慈悲に靈化せしめて、自他共に無上道に向上し、眞美善の極に到達し、佛々平等の極果を期せんことを。

信仰過程 光明生活三階

初發心より志を發し、道に入り、修行已に成熟し乃至實行に至る道程、又或は修行の階級。

小乗教四位を立つ、謂く方便と、見道、修道、及究竟道と。又七賢と七聖の十四位を立つ。

華嚴宗の如きは三生成佛、即ち三階を立つ、一に見聞位、華嚴無盡の法門を聞いて金剛の種を成す。衆生本具十身如來藏性具す。一乘甚深普賢法門を聞いて、無碍の種子を薰成して、當來十身圓滿の極果を作す。種子薰成して尙ほ果を獲べき妙因種子、此妙種子。一ら色を見、聲を聞くに由つて得る故に見聞位と云ふ。

二に解行位、都率天子等惡道より出已、一生即至離垢三昧前十地無生法忍及十眼十耳境界、

又善財始從十信乃至十地、於善友所一生一身上皆悉具足如是普賢諸行位者是此義也。

三に證果位、密家は理具と加持と顯得との三位を立つ。

今三位を立て位行を明す。一喚起 二開發 三體現 極樂へつとめてはやくいでた、ば、身のおはりにはまいりつきなん。宗祖

初喚起 因縁

信心喚起の因縁を明さんに、因とは人の先天性、即ち信仰得る心、此に遠因と近因とあり。遠因とは遠く如來法身から受けた佛性を根底としてゐる。近因とは宿世の習因とも、又は祖父の遺傳に、信仰喚起し易きと否との二性あり。

如來萬德總具の光明名號を聞いて、名言薰習は之が金剛種と爲りて、後に無量光

壽の當果を得べき妙因種子。此所薰の靈妙の種子は、或は色を見聲を聞いて種因となる。例せば導師は淨土の變相を視て深く其の印象が彌陀信仰の妙因と成りて、終には彌陀の應現と稱せらるる華報を得。宗祖は一心專念彌陀名號の導師の釋文が種因となり、專修念佛の宗を開くに至れり。彌陀名號とは名は體を徴す。一切萬德總括の名號が薰發の因と爲る。例へば植物の種子に根莖枝葉等の性分を具有する如し。

緣とは、吾人が聞薰の種子が信仰の因と爲つて、當果を得んと欲するを助成する勢力を云ふ。遠くは如來無緣の慈悲を以て徧く一切法界を照して念佛の衆生を攝取して捨てざる平等緣と、近くは師友善知識が懇懇に慈愛の心を以て信心を増長せしむるが緣と成る。(如來三緣を以て人の信念を助くる事は前に己に明しぬ。)

信心喚起の資料

信心喚起の因緣は己に明しぬ。因緣己に成り、佛種緣より生ず。名號薰發が信の種因と成ることは、喩へば植物の種子が土地に播下したる如く、植物の種子は土地や潤濕暖熱を受けて芽出し、萌出す。而して後に水と熱と植物養分の肥料を要する如くに、心靈に養分を要す。導師は五種正行を以て資料とす。

五種正行とは、

- 一、禮拜
- 二、讀誦
- 三、觀察
- 四、稱名
- 五、讚歎供養

喚起の二機 自修と傳承

一、自修。自誓受戒の如く、宗教的天才、又推勵苦修、自發的に自ら摩擦して火を

發する如し。

二、傳承。傳燈師に相承する如く、木を燒くに他の木の火を他に傳へる如し、又小兒が哺育せらる、如く、師友知識の心が感傳。

喚起の順序

若し自修、若し傳承、信心喚起の順序あり。喚起の因緣に依りて種子が發芽するの次第なり。之を五根と爲す。蓋し植物の根ありて能く増長するの基本たるに喩ふ。

一、信根。信根は彌陀の種子を信受し、歸命信賴して、之を中心眞體即ち本尊とす。自己の罪惡を信認し彌陀は親として信賴す。

二、精進根。勇猛精進に信心喚起の爲めに、推心力行す。教化を受くる開信の勇猛。

三、念根。如來を憶念して止まず。

四、定根。一心金剛の如く、決定して動せず。

五、慧根。信心喚起の時到り、曙光を見る。譬へば種子より萌發したる如く、信心喚起の覺醒を得。信の位とす。胎兒が長じて分娩する如し。

開發の位

是れ華嚴の解行位。密の加持成佛。天台の觀行即。

信心喚起して灰かに靈の曙光に接し、前途に光明を認めて、益々信心増長し開發し信心證得を欲望す。

既に萌發したる苗が次第に増長して、根莖枝葉發展し、花開敷するに到るを開發の向位とす。

小兒が哺乳より發育して成年と成り結婚期に到るか如し。

第三、體 現

信心開發すれば心機一轉し、靈き我生命に復活したる後は即ち佛子である。梵網に謂ゆる、衆生佛戒を受ければ即ち諸佛の位に入る。位大覺に同じれば即ち是諸佛の子なりと。

聖道門は彌陀佛一佛の分身の方より見て諸佛と云ふ。淨土門は聖道の諸佛を統一して彌陀佛と云ふ。彌陀と諸佛とは不一不異の同源なり。哲學的汎神的に諸佛と云ひ、宗教的に一佛と云ふ、本來一なり。今は彌陀の法王子と爲す。

佛子佛心佛行、如來と共に在り、我如來中に在り、如來我にあり。無限の光壽は吾人の個性に依つて現はる。此の個體は、無限の大海を根底とし、尖頭を水上に現はしたる巖である。

佛子、聖意を自己の意とし、三業四儀を以て聖意を現はす。之に三級あり。十行と十金剛と十地となり。

喚起し開發する時は己に十信の満位として如來と自己との合一不離の眞理を知見し十住の満位としては感情的に如來の大我と融合して、三密冥合、神秘的の幽邃甚く不思議の靈應妙感を實驗したる上は、常恒大我の中に安住するの心情と爲りしは、

十住の満位にて、己に從來の罪惡我は轉じて聖子たる靈我と生れたり。是より佛子としての實行は行爲を以て實現す。如來より獲得したる生命と勢力とは、三業の行爲に現はる。

十行即ち行位とは聖意を己が意志と爲る道德的行爲である。道德と云ふも道德の動機が最高等なる理想即ち如來より我に現はれたる道德の原動力なり。道德の實行には意志の鍛練を要す。此の鍛練即ち如來の靈化である。

十善、八正道、六度等は佛子の三業を道德的に陶冶するの機關である。之を自己の力にて陶冶するは實に難行道である。若し自覺して覺行圓滿、菩薩の願行を究竟せざ

れば成佛出來ぬとすれば、成佛は實に成じ難し。然るに宗教的に如來の恩寵を被むりて佛の聖意に靈育せらるゝ時は、任運に作爲する處自ら佛行と爲る故に易行道である。

昭和二年三月廿八日印刷
 同 三十日發行
 誌代年七冊壹圓貳拾錢(郵稅共)
 年拾貳冊 貳圓 郵稅共)

編輯兼 山崎 辨 成
 發行人 山崎 辨 成

東京市小石川區若荷谷町九八
 印刷人 小林 七 太郎

發行所 ミオヤのひかり社
 東京市小石川區水道橋二ノ四四
 振替東京六八五一番